

新たな不登校が生じない取組 「未然防止」の取組

不登校が生じない魅力ある学校・学年・学級づくりの推進

【取組1】(A中学校)

コミュニティ・スクールの取組の一環として、放課後自習カフェ（A中カフェ）を開催した。開催の背景には、「自宅ではなかなか勉強がはかどらない」、「仲間と一緒に勉強する場所がほしい」といった生徒の思いがある。複数人で話し合いや教え合いをしながら参加する生徒から、一人でじっくりと自習に取り組む生徒まで多様な生徒の居場所となっている。



【取組2】(B中学校)

今年度の運動会では、昨年度まで委員会の生徒が担当していた係活動をボランティア制とし、生徒の主体的な参加を呼び掛けた。呼び掛けに応じ、多くの生徒が自ら係を選び、競技運営や掲示、放送などの係で活躍した。活動を通して、仲間と協力し合う姿や互いの頑張りを認め合う場面が多く見られ、きずなづくりの取組として意義あるものとなった。また、自分の役割に責任をもって行動する姿や、裏方として支える生徒への感謝の言葉も聞かれ、互いを認め合う温かい雰囲気運動会全体に広がった。



【取組3】(C中学校)

第2学年社会科（地理的分野）の授業では、自由進度型の学習形態を採用し、スライド作成・発表の活動を取り入れた。これは、生徒にとって自ら考え、選択、決定する機会の保障となった。生徒が作成したスライドを使った発表活動では、生徒は個々の得意分野を選び、それぞれのペースで学習に取り組んでいた。また、これまでの学習で習得した知識やスキル等を活用しながら、生徒が意欲的に学習を進める様子が見られた。

【取組4】(B中学校)

夏季休業期間の終了前に「不登校の共通理解の促進」、「不登校の未然防止」の2点をテーマに研修を実施した。「不登校の共通理解の促進」については、「不登校は問題行動か」という問いを軸に、不登校という行動を根本的に考える機会となった。「不登校の未然防止」については、新規数と継続数のグラフを用いて、いかに新規の不登校生徒を減らすかが重要であるという視点を共有した。

多様な学びの場を確保する取組

〔「早期支援」及び「長期化への対応」の取組〕の推進

支援会議（C中学校）

支援会議では、地区のガイドラインに基づき、支援の手だてについて考えている。教育支援センターや地区が認めた居場所、ICTを活用した自宅学習等、多様な選択肢を考慮し、生徒の状況に応じた確かな支援方法を検討することは不登校の未然防止や早期支援、長期化への対応に役立っている。

アウトリーチによる支援（A中学校）

毎週、または隔週のペースで訪問支援を行った。継続的に支援することが、生徒との信頼関係の構築につながった。訪問先では、コミュニケーション活動やボードゲーム等での関わりを中心に、学校からの配布物の確認や、生活習慣や進路情報の聞き取りなど、臨機応変に幅広い支援を行っている。

校内別室における支援（B中学校）

生徒が校内別室を利用する際に個別記録の作成をしている。昨年度からの課題であった校内別室での過ごし方を踏まえ、目的をもって利用することを目指している。学級担任、保護者も内容の確認をしている。校内別室指導支援員と相談しながら、自習以外の活動では、ソーシャルスキルトレーニングやコミュニケーション活動に取り組んでいる。また、教科担当の教員とも連携を図り、実技教科の作品の作成にも取り組むことができるようになった。



デジタル機器を活用した支援（B中学校）

不登校生徒と隔週のペースでオンライン面談を実施した。面談の際には、実施時間や目的等を明確にすることで、生徒に安心感をもたせることを意識している。



関係機関との連携（B中学校）

SSWとの連携で「子育てサポート窓口」の職員と連携を図ることができた。「子育てサポート窓口」は地区の子どもや子育てに関わる総合相談窓口である。行政とも連携を深めることで、包括的な支援体制の構築をすることができた。

成果

巡回教員の配置は初年度であるが、不登校の各段階に応じた対応を計画的に実施した。特に校内別室指導では、不登校の未然防止と長期化対応に大きな効果を上げた。

課題

新たな取組を展開するために、巡回校における学年教員や生徒会との関わりを広げ、関係機関との継続的な連携を強化することが課題である。